

な表情をしていたか」など、そこにいる、子どもの表情が大切になってくるのではないでしょうか。

「慣らす—慣らされる」という関係で子どもを追いついてるのではなく、子どもの表情をくみ取りながら、これからも、気長に「焦らず、ゆっくり

と」というゆとりを持って、保育したいと思っています。

(安良保育園)

一年生が慣れるまで

橋本 由美



私は、学童クラブに勤務しています。学童クラブは、両親共働き等の理由で、学校から下校して

も家庭に誰もいない子どもたちが、放課後を過ごす施設です。学童クラブの子どもたちは、学校が

終わるとランドセルを背負ってここに来ます。そして遊んだり、おやつを食べたりして放課後を過ごし、五時になると自宅へと帰って行きます。私の勤務している学童クラブは、一年生から三年生が対象です。一年生で入室した子は、三年間、放課後をここで過ごし、三年生の三月には卒室。そして入れ替わって、四月からはまた新しい一年生が入室してきます。このピッカピカの一年生たちが学童クラブに慣れるまでが、一年間の中で一番大変で、大切な期間です(当の一年生にとっても、上級生にとっても、私たち指導員にとっても)。

入学してから二週間位は、一年生は方向別集団下校です。帰宅方向別にキリンコースだのパンダコースだのに分かれ、学校の先生に送られて下校して来ます。学童クラブに登室して来る子は飛行機コースで(何故か動物の名前でない)、ひとつの集団になって下校して来ます。顔と名前がまだ

一致しないので、とりあえず人数を数えます。一人、二人、三人、……二十五人。あーっ、一人足りない!必ず足りないのです。出席簿を見ながら一人一人を確認し、誰がいないのかを確かめ、学校に連絡をとって捜します。やっとみつけて学童クラブまで連れて来れば一安心。どうして間違っちゃったのかを聞いてみると、自宅の方へ行った、仲良しの子と同じ方へ行きたくなった、などとなく先生について行ってしまったなどなど。理由を聞いてると、子どもの発想の面白さに感動してしまふのですが、感動ばかりもしていられません。間違えないで学童クラブに来てくれるように、何度も繰り返し話します。そして、全員がびたり!と学童クラブに来られるようになると、学童クラブに慣れる第一歩はクリアです。その頃には、私たち指導員も、顔と名前が一致するようになっていきます。

学童クラブでは、子どもたちが登室して来る時の挨拶は「ただいまー」です。私たちは、「お帰りなさい」と迎えます。二、三年生は元気よく「ただいまー」と登室して来るのですが、新入生たちはこの挨拶に違和感を感じるようです。一年生たちは初めて登室して来ると、「お帰りなさい」と迎える私たちに、「こんにちはー」「お邪魔しまーす」と挨拶して玄関を入って来ます。「学童クラブでは、ただいまって挨拶して入って来るんだよ」と話すと、「なんでー」「ここはお家じゃないじゃん」「変なのー」と抵抗します。「学童クラブは、皆のお家の替わりなの。五時まではここがお家なんだから、ただいまでいいんです」と説明しても、誰も「そうか!」なんて言ってくれません。変だよとぶーぶー言います。でも、二、三年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが「ただい

まー」と登室して来るのを見ると、とりあえず真似っこして、「ただいまー」と登室して来るようにはなりません。でも、この「ただいまー」はまだ本当の「ただいま」ではありません。本当の「ただいま」になるためにはもう少し時間が必要です。本当の「ただいま」が自然にできるようになった時が学童クラブに慣れた時だと、私は思っています。

学童クラブの生活のほとんどは自由遊びです（そうでない所もあるようですが、私の知っている学童クラブは大抵自由遊びが中心です）。他の子や近所の迷惑にならないように決められた約束はありませんが、それほど沢山はありません。すぐに覚えられることばかりです。その約束を破らなければ何をしてもいいのです。室内でゴロゴロしながら本を読んでもよし、トランプ、将棋、オセ

ロ、カルタをするのもよし、外で缶けり、ドロケイ、ドッジボールなどとするもよし。ちゃんと宿題をすませるよい子もいます。しかし、入室したばかりの一年生は、何がどこにあるかがまだ覚えられないし、友達関係もできていないので、どうやって時を過ごすべきか（四月中は十時、十一時という早い下校時刻なので溜息がでる程長い時間があるのです）、しばらくはとても困り不安になります。そこで、私たちに何でも聞きに来ます。「先生、折り紙していいですか」「先生、本読んでいいですか」「縄飛びしてもいいですか」「トランプどこ?」「おしっこ行っていいですか」。同じ子が同じことを何度も何度も、もう判っている筈なのに聞きに来たりします。「さっきも言ったでしょ」「何度も同じこと聞かないで下さい」は禁句です。誰か何を聞いてきても初めて聞かれた

時と同じように返事をします。絶対に怒っちゃいけません（まだまだ修行の足りない私は、時々タイラついてしまうのですが）。ずーっと私たちの側にいて、「何やってるの?」「それ、何なの?」「どこへ行くの?」、トイレにもついて来て、「先生まだー。大なの小なの」と呼びたてる子もいます。「我慢、我慢、怒らない怒らない」は、この時期の指導員の合言葉です。

上級生が登室してくると、上級生にもくっついて回ったり、質問責めにしたりします。例年、感心させられるのですが、上級生は私たち以上にこういう一年生によく付き合ってくれます。色々な遊びを実に根気よく教えてくれます。大人が聞いているとそんな説明でわかるのかしらと思うのですが（例えば、大人なら「大きい」の反対は「小さい」と言いますが、「大きくない」という説明

のしかたをしています)、子ども同士の独特のコミュニケーションで、ドロケイや大縄飛びやウノなどの複雑なルールをちゃんと伝えていってくれます。子どもの教え方はとても面白く、私たちも教えられることが沢山あります。

こうしているうちに友達関係ができ、物の場所も覚え、気のあう上級生もみつけて、学童クラブで遊ぶことが楽しくなってきました。夏休み前の七月頃には、一年生はほぼこの状態になります。勿論、「ただいま」の挨拶は自然にできるようになります。学童クラブが帰ってくる場所になるんですね。

こうして、一年生は学童クラブに慣れます。クラブ便りにも、「一年生もすっかりクラブに慣れ云々」と書くことができます。そして、夏休みにむかって新しい次のステージが始まるのです。激しいケンカや、おもちゃをあげたのあげないの、

集団脱走事件など、慣れてきたからこそ起きる色々な出来事に、今度是对応していかななくてはならないのです。

(江戸川区立船堀第三学童クラブ)

